

かる事となる。次いで明治神宮造營局評議員を仰せ付けられ、又内務省所管事務政府委員となる。同八月正五位に叙せらる。

錦次郎は検事辯護士として法曹界に名をなし、被告のため彼の雄辯にして快活なる口調を以て條理整然たる辯論を聴く毎に、頭腦の明晰を思はしむ。又新潟市の辯護士會長として令名ありき。

錦次郎の教育界のために盡されたるは又甚だ大なるものあり。明治三十九年新潟縣教育會の副會長に選ばれ、次いで四十三年同會長に推され、爾來歿する迄其職に在りき。又帝國婦人協會の經營にかゝる新潟女子工藝學校長として女子教育の重職を受けられ、之れが經營に熱心努力せられたる結果、同校今日の基礎を築かれたり。縣の教育會長として、縣下教育振興のため、繁忙の身を特に各地の講演に臨まれ、教育上の所説を快辯に依りて述ぶるや、滿堂の聽衆は常に感動せざることなかりき。人格高潔にして熱情以て君士の範たるに足る。

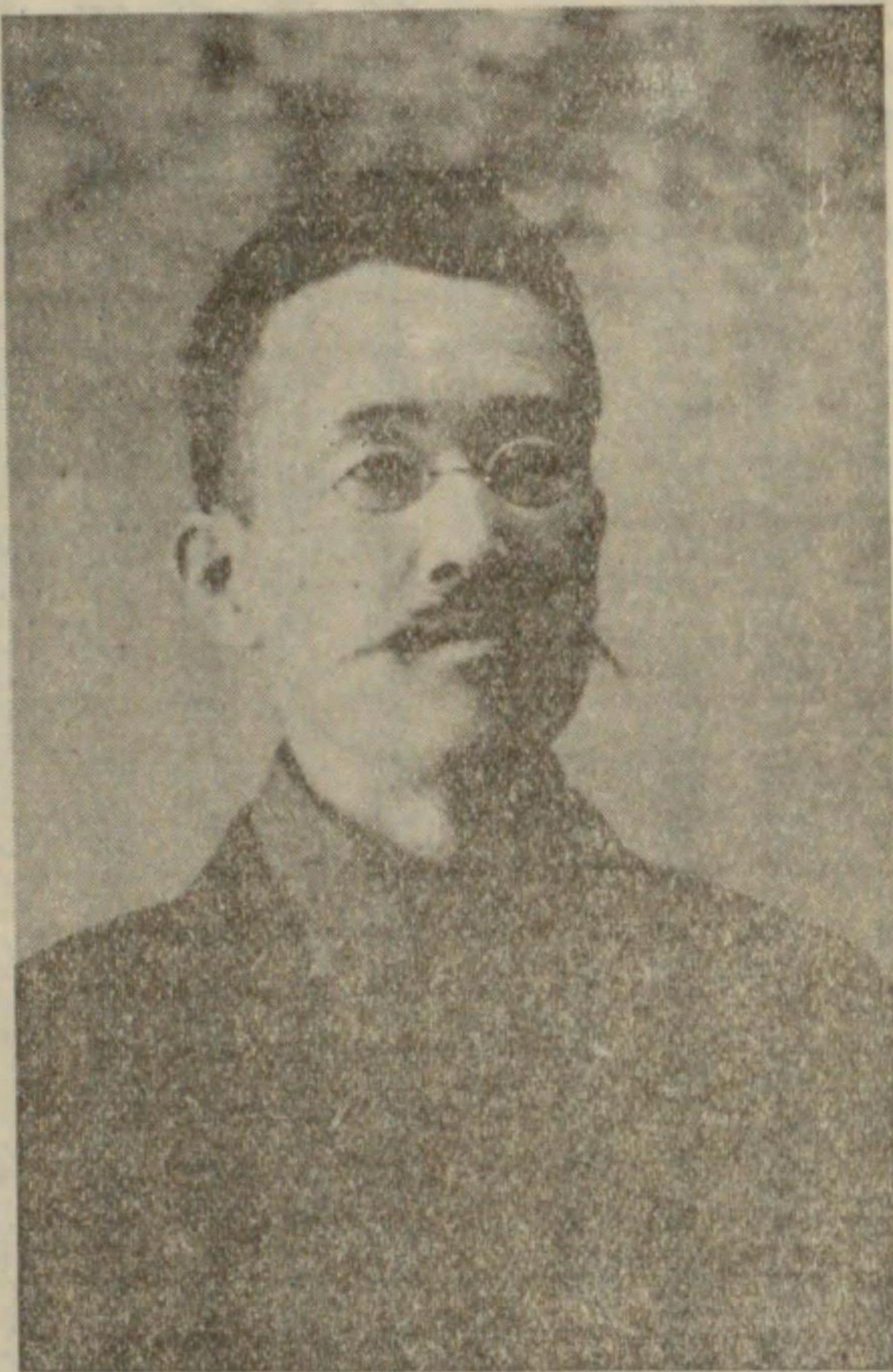
墓誌銘

鳥居錦次郎號扶桑、越後村上人、考諱和達、妣鳥居氏、君其第四子、資性謹嚴、弱冠遊東京、學中央大學、業成爲辯護士、尋任檢事、無機辭、官再爲辯護士旁從育英之事、後選代議士任內務省副參政官、叙正五位勳四等、在任二年、掛冠爲辯護士、大正八年五月二十五日病卒、距生慶應三年九月二十八日、享年五十有三、配嶋田氏、無嗣銘曰、
謹嚴厥行、清高厥容、欲見伊人、冬嶺孤松

法學博士 花井卓藏 誌

藤山茂實

藤山茂實は初め銀太郎と稱し、晩年茂實と改名し研菴と號す。村上藩士にして、文久元年十月十三日江戸に生る。幼にして克從館及び村上學校に學び、謹厚を以て稱せらる。年十七にして新潟學校英語講習科に入り、四年にして業を卒ふ。又藩儒石井翠竹に従うて漢籍を問ひ、文章に長ず。既にして新潟日々新聞社に招かれ、編輯の暇、英文學を研究す。精苦人に絶し、才學日に進み、名聲随つて興る。遂に推されて主筆となれり。此時民權說盛に行はれ、志士慷慨、時事を論ずるもの、往々過激に失す。唯研菴平正を主となし、敢て風俗に媚びず。嘗て世風の頹廢を慨し謂ふ、我國儒道を崇尚し、忠孝以て教を爲す。今日の弊を拯ふもの亦儒道に如くは莫しと。明治二十二年



(實茂山藤)

山梨縣師範學校に聘せられて教鞭を執れり。年三十にして始めて東京に遊び、文學博士根本健齊、全島田篁村に従ひて經典を力攻す。居ること三年、郷里の父老村上私學校長を以て之を迎ふ。研菴謂ふ。宿志以て成す可きなりと。乃ち歸りて生徒に授く。私學校の縣立と爲るに及び、又教諭に任せら

れ、一意提誘二十年、病みて大正元年十二月歿す。享年五十二。研菴幽貞質實、表襮を以て心と爲さず。職教諭を超えず。名亦一郷を出づる能はざりきと雖も、謙退を以て處し、忠恕人を待ち、交遊の間未だ嘗て惡聲を聞かず。其の生徒に教ゆる尤も懇切、生徒の敬して且つ之を信する亦た甚だ深し。校内事ありて校長の命或は從はざることも、研菴之に臨にめば一言にして解く可し。世の下重く上輕きは動もすれば相傾軋す。唯研菴德望迥に校長に過ぐ。而かも殆ど斯人の如きもの即ち是か。曾つて北越孝子傳、越佐人物を著はし、侯伯士大夫より儒醫僧道農商の流に至るまで搜羅遺さず。忠臣義僕孝子節婦に於て特に意を致す而して岩船郡會の囑に因り、郡誌編纂に従事すること數年、多數の資料を蒐集して立稿されたるも未だ完成に及ばずして止みしは遺憾とする所なり。

大竹澤治

大竹澤治は村上本町の人、大竹義榮の二男にして、明治二十四年村上私學校を出で、陸軍士官學校及び陸軍大學に入り、優等を以て卒業し、恩賜の軍刀を拜授せる秀才なり。明治三十五年陸軍大學を出づるや間もなく三十七八年戰役あり。此時に際し、大本營附大尉として出陣し、兒玉大將に従ひて第十三師團參謀として其勇名を擧げ、凱旋後軍事研究として獨逸に派遣さる。歸朝後陸軍大學教官、陸軍參謀本部情報部長、京都三十八聯隊長に歴任し、大正十一年三月參謀本部第一部長となり、陸軍少將正四位勳三等功四級の榮を得られたり。

少將は大正九年國際聯盟委員として、佛國に又華府會議に陸軍側委員として米國に出張せり。大正十一年十一月四日四國大演習の際、香川公會堂に於て演說中腦溢血を起し、一時危篤に陥りしも、其後健康を恢復し、一ヶ月程職務に服せしが、同十二年五月上旬より又病床の人となり、治療に努めたるも遂に其効なく、七月二十九日逝去せり。享年四十九。國家のため眞に痛恨に堪へず。少將は頭腦明晰にして剛氣、辯舌に長じ殊に英佛獨語に堪能にして、陸軍部内に於ては將來を囑望される戰術家として重きをなし居れりと云ふ。

永井金次郎

永井金次郎は村上本町出身にして、明治七年五月三日生る。家素と富まざりしを以て、精勵苦學、一郷子弟の模範と稱せられ、才氣亦夙に秀づ。二十七年東京法學院に入り、三十年拔群の成績を以て同校を卒業し、高等文官試験、第一回判檢事登用試験、辯護士試験を同時に受け、三者共最上位に合格して世を驚かせり。同年十二月司法官試補となり、浦和區裁判所詰檢事代用を命せられ、卅一年青森縣參事官、三十五年千葉縣參事官に任せらる。後三十八年同縣事務官に進み、次いで廣島縣事務官となり、翌年富山縣内務部長に榮轉す。四十二年官命を帯びて韓國に赴き、大正二年高知縣知事に進み、一時職を退きしが、八年四月樺太廳長官となり令名世に聞えたり。十三年六月休職となり、昭和二年四月三日歿す。功を以て正四位勳三等に叙せらる。

君才氣縱横にして能く部下を統御し、其事務を處決するや最も公平にして、良二千石の稱ありき。

佛海上人

佛海上人は文政十一年(1828)五月九日村上町近藤庄三郎の家に生る。幼にして狀貌異凡、兒性妄動輕舉

せず。嬉戯常に修法をなし稍長じて出塵の志あり。父母察すれども長子の故に肯せず。然れども上人其志愈堅く、三面川の清流に浴し、或は夜中近郷の社寺を巡拜す。斯くする事三年餘、遂に一夜家を出で、羽前國東田川郡本門寺に入りて剃髮す。之より木食大行し、更に注連寺に入り、刻苦忍耐業を修め、或は湯殿山に籠りて數珠を斷ずる事殆んど三千日、或は食を斷つこと三七日に及ぶ。安政二年正月權律師の釋位を得、同六年五月權少僧都となる。同七年諸國の靈場巡拜の途に上り、十有餘年戒業漸く進み、後羽前本明寺に住して本堂を再建せり。其間權大僧都を授けられ、又法師、上人號、院號を賜はりたり。明治七年錫を郷刹觀音寺に移して住職となり、同八年本堂を再建す。之より先羽前注連寺再建に數千圓の淨財を寄進し、其他神社、佛閣、諸役所等の新築修繕に喜捨せり。特に貧民救恤には最も意を注ぎ、金品を與へて人に顯はさざりき。

明治二十七年日清の役起るや、上人は毎夜中念佛祈禱をなし、役終りて兩國の講話締結し、償金及び遼東半島の分譲を約す。上人之を耳にするや、面直ちに惜憂を現はす。從者其意を問ふ。曰く之れ他日必ず他より交渉の入るべしと。後果して三國の干涉となり、國民憤怒の中に之を返還するに至れり。上人は神通力を有せられ、人の知らざる事をよく透視されたりと云ふ。村上大町の青山蔦子、塩町の木村庇藏、寺井榮藏は深く上人に歸依し、後其木像を安良町の彫刻家山脇三作に囑して、卅二年五月五日竣成を遂ぐ。高さ二尺八寸餘、之を十輪寺に安置す。上人の高徳を慕うて門下となる者八十餘名に及べり。斯くして衆人を濟度し、明治三十六年三月二十日觀音寺に齡七十六を以て寂滅す。遺骸は同寺に埋葬し、碑を建てて以て遺徳を追慕す。

佐藤伊助

佐藤伊助は村上町の素封家に生れ、徳望家として多年名望を一身に負へり。早稻田大學を卒業し、郷黨より推されて前後三回に亘りて衆議院議員となり、國事に奔走し、勳四等に叙せらる。衆議院議員を退くと共に専ら巨萬の富を居郷町村の公益事業に投じ、あらゆる公職に熱誠なる貢献を爲し、平生決して名を求めず。謙虛にして圓滿なる人格は一郷景仰の標的となれり。大正元年胎内川發電會社計畫主腦者たりしに十年一月腦溢血のため俄に歿す。享年五十五歳。翌年十二月村上町有志相謀り其の菩提所なる東林寺に碑を建て、其功を永久に傳ふ。

戦死者准戦死者

明治以後我が郷土より出で、君國のため、身命を捧げたる勇士尠ならず。西南の役、日清役、日露役に於て戦場の露と消えたる者、戦地に於て名譽の負傷をなして後歿したる者、戦争のため病を得て歿したる者の英靈を祀り、毎年招魂祭を舉行す。其芳名左の如し

歿年月日	戦	歿	の	場	所	賞勳位階	下賜金	職	氏名	
明治七年	清國	大孤山	の	海戦	に	重傷を負ひ戦死	正八位	四一五 <small>円</small>	海軍一等水兵	佐藤長作
三六、一、二五	朝鮮	仁川	兵	站	部	病院に於て病死	勳八等	三九〇	陸軍憲兵一等軍曹	三枝志解理
二六、三、二六	臺灣	臺南	舍	營	病院に於て死亡	不	不明	全輜重輸卒	山際貝一郎	
二六、九、二五	臺灣	基隆	に	於て	死亡	不	不明	臺灣軍夫	小栗義政	

三六、九、三 全 水野七太郎
 二八、九、三 全 神谷 兎作
 二六、一〇、五 全 吉田 勝夫
 二六、二、一五 臺灣臺南府に於て死亡 全 小瀧 鎌藏
 三七、二〇、三 銃瘡を受け清國半拉山子第二師團第四野戦病院に於て死亡 從七位勳五等功五級 一八〇〇 陸軍歩兵大尉 鈴木 義夫
 三六、一、二六 清國黑溝臺に於て戦死 從七位勳五等功五級 一四〇〇 陸軍歩兵中尉 岩山 鑄太郎
 三六、三、二〇 全奉天省北陸附近に於て戦死 從七位勳五等功五級 一八〇〇 全 大尉 若林 壯藏
 三六、四、一 全盛京省第三野戦病院に於て銃瘡の爲め死亡 正八位勳六等功六級 一八〇〇 全 少尉 高橋金一郎
 三七、八、三 全東盤龍山砲臺附近に於て戦死 正八位勳五等功五級 一四〇〇 全 中尉 鳥居 主税
 三六、三、九 全田義屯附近に於て戦死 勳 八 等 四四〇 全 二等卒 藤田 康
 三七、一、一 全九連城に於て戦死 勳七等功七級 六一〇 全 伍長 夏目長次郎
 三七、二、一七 全盛京省遼陽兵站病院に於て病死 從五位勳五等 九〇〇 全 大尉 田坂 定富
 三六、三、九 全田義屯附近に於て戦死 勳八等功七級 四七〇 全 一等卒 吉田政三郎
 三七、一〇、四 全奉天省にて銃創を受け半拉山第四野戦病院に於て死亡 勳 八 等 五二〇 全 上等兵 武笠 七藏
 三六、三、二四 全盛京省蘇牙屯附近に於て戦死 勳八等功七級 五二〇 全 全 小林才次郎
 三七、九、三 全太平溝東方二〇三高地に於て戦死 全 六五〇 全 伍長 鷺田 米治

三六、一、二九 朝鮮仁川兵站部病院に於て病死 勳 八 等 三九〇 陸軍憲兵一等軍曹 三枝志解理
 三六、一〇、三 全盛京省南沙寧堡舎營病院に於て病死 三八〇 全 軍曹 山口 恭平
 三七、五、二 全大ヨーカーに於て戦死 勳 六 等 八五〇 海軍上等兵曹 成松壽太郎
 三六、三、九 全田義屯に於て戦死 勳八等功七級 五五〇 全 上等兵 岩崎鈿三郎
 三六、二、二七 金澤衛戍病院に於て病死 正 八 位 五五〇 全 騎兵少尉 吉田 市藏
 三七、二、二六 清國大平溝東方二〇三高地に於て戦死 陸軍歩兵曹長 金澤 直吉
 三六、八、二 勘察加オゼトナヤ河口に於て歿す 海軍々醫少尉 沓掛 吉夫
 昭三、八、二 演習中水雷検査の際爆烈殉職 海軍 大尉 峯木 茂
 以上は村上本町出身にして外に西南の役に従軍し、戦死したる小竹榮治、赤見正次の兩勇士ある事も永久に傳ふべきものなり。以下村上町出身者を掲ぐ

三七、二、三 廣島豫備病院に於て病死 一五〇 陸軍歩兵軍曹 近 藤次郎
 二六、九、八 臺灣へ航行中船内に於て病死 二五〇 全 一等卒 石黒 金松
 二六、九、八 臺灣へ航行中船内に於て病死 二五〇 全 中嶋巳之吉
 二六、一〇、八 臺北府兵站病院に於て病死 二八〇 全 憲兵上等兵 伊與部忠治
 二八、一〇、三〇 台湾北關内に於て戦死 三五〇 全 上等兵 佐々知須賀雄
 三七、五、七 韓國義州點島附近に於て戦死 勳 八 等 四七〇 陸軍騎兵一等卒 山本 畊一
 三七、六、一五 玄海灘に於て船と共に沈没して戦死 勳 八 等 四四〇 二 等 卒 丹羽助太郎
 三七、八、三 清國大平溝東方高地に於て戦死 勳 八 等 五二〇 全 歩兵上等兵 長谷川榮藏

三七、九、七	全甲山附近に於て戦死			六一〇	全	伍長	稻垣莊次郎
三七、一〇、二	全本溪湖に於て戦死	勳八等		五二〇	全	上等兵	片野龜次郎
三七、一〇、三	全揚城塞附近に於て戦死	勳八等功七級		五二〇	全		川上兼藏
全	全			五二〇	全		山脇英三
三七、三、一	全旅順西北方二〇三高地に於て戦死	勳八等		四七〇	全	一等卒	齋藤忠藏
三六、三、四	全盛京省達子堡附近に於て戦死	勳八等功七級			全		木村長太郎
全	全				全		八藤後榮吉
三六、三、〇	全葛布街附近に於て戦死	勳八等		二五〇	全	上等兵	齋藤茂三郎
三六、三、五	全張樓子の戦に負傷し第二師團第三野戦病院に於て死亡	勳八等			全		深澤牛藏
三六、九、八	全青泥窪兵站病院に於て病死	勳七等		三五〇	全	軍曹	中村徳十郎
三六、三、二	仙台豫備病院新發田分院に於て病死			一一〇	全	二等卒	飯島吉作
三六、三、七	全				全		佐藤求四郎

口碑傳説

怨靈物語

東照公の子、武田萬君と申されし人は早世なりしが、未だ在世の時、丹羽源左衛門と穂坂掃部と兩人共に千石宛にて家老職を勤めけり。源左衛門は年長の妻子もあり、掃部は未だ妻もなし。元來甲州信

玄衆にて、甲陽軍鑑にも姓名ある旗本にて先手なり。其頃奥方女中の内に一人の美婦あり。微恙の爲め暇取りて引こもり居たり。程すぎて之を掃部に取持つ人あり。掃部も同心にて源左衛門へ謀りければ良縁なりとの事にて妻女に定めけり。然るに源左衛門思へらく、此は掃部が己に此女と慰懃を通じながら、家老職をも勤むる身なるを以て奥方より呼び寄することも如何にと考へ、人の氣の付かぬ如く、斯く謀りたるなりとて深く掃部を憎みたり。然しこは源左衛門の邪推にて掃部には毫もかゝるやましき心はなかりしなり。元來源左衛門は此女に執心ありし故、嫉妬の心よりあさはかにも掃部を倒さんと思ひ立ちしこそあさましけれ。怨靈の事これより起れり。之より源左衛門は一意掃部を罪に陥れんと欲し、我が印判の外に又同形のもの一個を彫刻せしめ、常に之を巾着に入れて携帶せり。此兩人は金銀元締を勤め、兩人の調印により出納をなし來りしを奇貨とし、金銀の額少き手形には正印を捺し、多きものには偽印を用ひ、かくして數年を経たりけり。斯かる内に萬君殿早世せられしを以て、勘定立申したしと兩人申上げ、役人立合にて調査する事となれり。

此時源左衛門は估卷を一見するや驚きたる面地にて、如何なればかゝる估卷の混り居ることぞ。こは某の印章を盗用したるものなりとて、一々是を撰び出し、是は某の印なり、これは偽印なりとて比較して示しければ、立合の役人よく見ると成程眞偽明瞭にて、誰も源左衛門の悪計なりとは夢にも知らず、一同掃部を謀判人と認め、老中の邸宅に代りて對決に及ばれけり。掃部は全く身に覚え無きことなれども、辨疏するに由なければ、毎度其身の不利となり、終審は土井大炊頭役宅にて行はれ、遂に掃部の負と決定せり。然れども事重大なれば、今一度慎重に審議の要ありとて其日の判決を延ばしけり。掃部思へらく、源左衛門の爲め、身に覚えなき冤罪を蒙り、處罰せ

られんとは實に残念なる事かな。憎きは源左衛門、是非を争ふとても詮なきこの場合、唯最後の手段あるのみと。大炊頭宅の玄關の板間を下る時、大脇差を抜きて源左衛門の頭部目がけてさつと斬り付くれば、切尖鴨居に當りたり。こは失敗せりと再び斬りつけし時には、源左衛門身をかはし、淺手を負ひながら力を揮つて掃部を組み伏せたり。此物音に驚き、玄關の番士駈け來り、兩人を引き分けた。後兩人は各家にて謹慎を命せられたり。其後上よりの沙汰に、己の非分申譯立たず、剩へ裁決前に當り、相手方を殺害せんとしたる掃部の行爲重く不届なり。丹羽源左衛門は過なき上に疵を蒙り、嘸無念なるべし。掃部夫婦を汝に與ふ。裁配勝手たるべし。との事なり。

源左衛門は事成就せりと大に喜び、尋常に殺しては興なしと思ひけん、源左衛門は六月炎天に庭の李樹に掃部を縛し、廿日の間に手足の指一本づゝ切り、なぶり殺しにせんと笠も冠せず、雨にも打たせてさらし置き、其上妻女を拉し來り、掃部の側に坐せしめ、殘虐の極を盡してその伸吟せる様を椽側に出でてさも愉快さうに見物し、侍士と談笑すること數となりき。掃部は恨骨髓に徹し、切齒して曰く、己の非行を省みざるのみか、武士たる者を衆人の前にてかくの如き殘忍暴戾の恥辱を與ふこと惡鬼と言はん、獄卒と言はん。此恨は天地に盟ひ、七代までも思ひ知らせん。と罵りければ、源左衛門曰く、玄關にてだし抜けに斬り付けしも、余に組み伏せられて打ち負かさるゝ程の汝、死後何と崇らんや、とてからゝと笑ひけりとなり。

掃部夫婦は遂にかくの如く殘酷なる源左衛門の手に命を絶たれたり。果して絶命の其夜、源左衛門の玄關の戸を叩くものあり。侍士出で、見れば穂坂掃部なり。曰く、余の來りしを主人に告げよと。侍士驚愕絶倒す。掃部はつかゝと源左衛門が寢室に入り、その寢具に上らんとす。源左衛門亦愕然として起き上り、側なる枕刀を執り、目を瞑らして一喝すれば掃部の幻影忽然として消滅せり。惡人にも盛なる時は崇なきものにや。源左衛門は此後一生別義なし。(一説に、源左衛門此時より亂心し、掃部の幻影を斬らんとて刀を揮ひ、自ら深手を負ひ、もたへ死しけりと)。其嫡子に六太夫といふ者あり。俄に亂心して故もなく自殺す。次男も同じく自害す。此六太夫は信正公の姪嬢なり。娘一人あり。内藤家へ寄食す。縦山求馬に千石を興へて其妻となせしが、之も亂心す。其腹に仁兵衛、小兵太(島田姓を冒す)ありて兩人共亂心す。仁兵衛の子甚右衛門、其子大藏、皆亂心せり。(縦山退休の物語なり。)

烏居蓮馨女の怪力

蓮馨女俗名を詳にせず。美濃大垣戸田采女正殿の藩中正木太郎太夫要信の女なり。出で、村上藩烏居家の末家二代の祖刑部右衛門和隆の妻となる。久うして家族その怪力あるを認めず、たゞ尋常一様の婦人と視居たりき。或日主人庭園に手洗水石を据ゑんとして若黨始め人夫數人をして、豫定の位置に石を置かんとするも、石重くして、容易に主人の意の如くならず、衆大に苦しむ。たまゝ晝食休憩の後、主人座敷へ來るに午前中の石、己の思ふまゝに据ゑられありき。主人不思議に思ひ、種々詮議の後、始めて女史の所爲なることを知り、衆皆舌を巻きてその怪力に驚きたりといふ。女史力を入れて手拭を絞れば容易に斷ち切ることを得。故に平素手水を使ひ手拭を絞るに加減を加へしといふ。或時弟某と力を角し竹を抜き取りたるに、女史は履齒をも没せず、顔色常の如く平然として抜き取りたりといふ。その力量幾何なるを知らず。今尙ほ人口に傳へて奇聞となす。子孫數世膂力を傳ふとい

ふ。女子寶曆五年十一月廿九日没す。村上寶光寺に葬る法名を白心院香譽蓮馨法女といふ。年齒詳ならず。

遠藤改藏

遠藤改造は始め改造と稱し、後權平と改む。彌惣兵衛の二男にして、天保五甲午年村上に生る。父彌惣兵衛(鼎)は村上藩の兵學者なり。兄弟七人あり。兄を武六といひ、後彌兵衛と稱す。家を襲ぎて藩の劍術師範となる。改造は其の末子にして他は悉く女子なり。幼にして剛愎、他より呵責せられる様の事あれば、その人のあやまり来るにあらざれば、道路をも構はず横臥して動かざりきといふ。父母兄弟頗る其教訓に苦しめり。長じて藩の道場に入り、直心影流を學ぶ。刻苦精勵儕輩を凌ぐ、その後江戸に出でて長沼庄兵衛の道場に學ぶ。當時江戸にありて、各道場を構へ、門弟數百千人を養成せし有名なる劍客に齋藤彌九郎、長沼庄兵衛、千葉周作、桃井春藏等あり。各藩の士爭ふて其門に入り、其技を練りしといふ。改藏亦刻苦精勵す。師庄兵衛其技を愛し、心を盡して之に教ふ。其技殆ど妙に入り、内藤の黒權としてその名劍客の間に聞ゆ。蓋し改造身体小造りにして、その色黒きを以て、内藤の黒權とあだ名をつけしならん。六七尺位跳ぶ事は自由自在にして、凡そ六尺程隔てたる周圍に七八人を立たしめ、我を捕へて見よとて合圖と共に飛び掛れば、天井板にとび着きて聲を掛け居るのみ。かくして幾度反復すれども之を捕ふることを得ずと。

師も亦意を將來に屬せり。後師の周旋により、土岐侯の藩中某家へ婿養子となる。然れども素行治まらず、遂に離縁となりて歸藩す。而も慢心の極、父兄の訓誨を守らず、遂に他邦さるるに至る。これ

より越後の各地に流浪の生活をつゞけたり。改造の劍術は真劍により、その膽力と、その呼吸を得たるものにして、當時の所謂飾り劍術にあらず。劍を取りては殆ど人間骨無の感あり。故に他より傍觀する時は、誠に素直のものにして餘り太刀數も多からず、極めて遅緩の様なれども、さて對手より見る時は防がんとして防ぐこと能はざりきといふ。常に言ふ、劍術の妙に達するには、決して天稟によるにあらず。刻苦精勵、血を吐く苦痛を忍びてその極に至るもの自分など幾度死する思ひをなせしか知らずと語り居れりと。會津、水戸などは舊藩中武道の盛なるところ、改造屢々試合に赴きたるが、さすがの藩士も、今にその精妙に服し居るを見ても、その技の優れたるを知るべし。長岡藩の篠原六郎と云ふ者村上へ試合に來りし時、劍士の錚々たるもの、不在なりしが大抵一撃を加へられ僅かに若林準之丞が柔道にて相打となりしが、今にその當時を見たるもの遺憾として語りぬ、その篠原と長岡に於て試合したる時、篠原は太刀風するごとく立合たるが、改藏の太刀は至つて少なく、而もその真髓を得て、歩合は慥に改藏にあり、おどろきたりと長岡藩士の實語なりき。篠原は長岡城攻撃の際、敵を斬ること無數遂に砲丸に斃る。

改藏中條町博徒紅葉山の用心棒となり、放浪中博徒その專横を惡み、之を殺さんとし、その備なきを伺ひ、十數人、白刃を掲げ、その居を襲撃す。女婢竊に之を改藏に告ぐ。改藏之を聞き、平然薪を携へ、階を下りて邀撃す、衆辟易潰走す。又他藩劍客の村上に赴かんとするものを、途中小櫻峠邊に迎へて言ふ、村上藩の劍客、優秀なるもの數ふるに違あらず。まづ余と技をくらべ、余にまさらば行くべしと。修業者道具を身にまとい用意をなすも、改藏素面素小手、路傍の柴を切りて之に向ひ、これにて足ると。修業者憤然として其輕侮を懲さんと、滿面朱をそゞぎて之に當るも、忽ち撃ち込まれ、

恰かも小兒を弄ぶに似たり。かゝる拙き業にて村上に行きても詮なし、今少し修業を積みて行くべしと。修業者這々の体にて逃ぐるが如く立ち歸るを常とす。何んぞ知らん改造は天下の劍客にして到底村上藩の劍客に非ざることを、村上藩は改造によりて、他の修業者の侮を禦ぐを得たりといふべし。改造のいまだ江戸藩中にありたる日、他流試合に來り、勝負の點付きて不服なる場合、いつもその争の極は、竹刀にては分りがたし、真劍にて勝負を決せんと。對手も武士の面目として、然らば真劍にて應せんと。いつも道場の師範をして、その中裁に苦ましめしと。たとへ運用真劍の極秘を握りしとはいへ、その不謹慎亂暴も驚かるゝに堪ゆ。又或時某農家へ金の無心に赴きたる事あり。主人言を左右に托し、容易に應ずる氣色なし。改造憤然刀を抜き、爐中の鐵の自在鍵を一撃の下に切斷す。主人膽を消し、その要求に應せりと。その劍技の尋常一様にあらざる一斑を窺ふに足る。明治戊辰の役寺泊觀音寺邊に居りしが、暗に村上藩に聲援し、隨分敵を斬りしといふ。後庄内に走り、素行よろしからず。然れども庄内藩にてその技を恐れ、窃に銃殺せしとか。或は毒殺せしとか。戦後庄内藩に嚴談せも遂に要領を得ずに終れりといふ。素行治まらず、その終をよくせずといへども劍客としては、幕末における天下有數の人なりき。(遠藤虎龍太、和平の叔父)

百武長兵衛と鬼武

江戸に鬼武と云へる俳諧師あり。或時村上に來り、百武長兵衛と會せり。長兵衛は當時村上にての俳諧師にて奇才あり。

始め長兵衛、鬼武の無口なるを見て評判程の人物にては非じと思ひどり、長兵衛稍之を輕んずる風あり。暫くありて鬼武は徐ろに口を開きて曰く、昔孔子は一を聞いて二を知れり。我は一を聞いて漸く一を知るのみなりと。長兵衛聞いて曰く一を聞いて一を知るは安きことなりと。鬼武曰く、君はなか／＼の智者なり。然らば村上町の戸數は何程あるやと。曰く、何千何百何十何戸と。更に鬼武曰く、當町北端の戸主の姓名は何と云ふやと。長兵衛、中村藤太郎、其隣は吉田安平、其次は安藤三吉と順に片町の端より加賀町、塩町、肴町と細工町まで一軒も残らず申し聞かせけり。鬼武之を聞畢るや、長兵衛の云へると同じく一軒も違へず云ひ直せり。而して曰く、此れ一を聞いて一を知ると云ふものなり。始めの一人を聞いて殘の九人の姓を覺るは一を聞いて十を知ると云ふものにて、始めの一人を聞いて次の一人を覺るは一を聞いて二を知ると云ふものなりと。之を聞きて長兵衛大に感服頓首せりと云ふ。蓋し鬼武が始め暫く黙し居たるは、長兵衛を十歳程の少年と見なしたるならんと。

五月女 鉄丸

鐵丸幼名を八十郎と云ひ、正久と改め、後更に鐵丸と號せり。父を五月女五郎右衛門久重と稱し、世々内藤侯に仕へ。鐵丸十八歳にして元服し三代信照公より甚五右衛門の名を賜はれり。大阪四手番の時、横山平兵衛入道平入の弟子となり、天下無双流の劍法を習ひ、後一流をなし、藩中壯士の師範となれり。平兵衛入道は三尺の鐵杖を以てよく五尺の刀を受け止めしとか。鐵丸はこれより遙に短き一尺五寸の杖を以て五尺の刀に對せりと云ふ。又居合は父より傳授せる所なりと。棒は己自ら從者を相手に研究し、一派を編出したるものなりと云ふ。鐵丸又鎌を善くせり。之又自身にて一流を出せるもの、由にて、後に至り、其細出したるものに命名して平心流と稱せりと。而して其原本は現今同家子

孫に存せり。其他巻物軸及び免許狀等をも藏せりと云ふ。饒丸貞亨四年十一月棚倉にて歿す。年五十六。信照公に仕へたるもの、如く、同公より拜領せりと云ふ内藤家の指物一流をも藏せり。其紋章は軍扇様の印にて柄に房と思しきものは付けるものなり。

白川國藏

白川國藏は村上藩士なり。本小田邊氏。出で、白川家を嗣げり。國藏は越後第一の游泳家にして、或時は瀬波港より粟生島まで八里の海上を泳ぎ通したりと。又鶉の如く河海に潜り魚貝を捕へたり。或時蛸を獲へんとして海中に潜りしに、蛸は岩穴に入りたるを以て追ふて岩穴へ手を入れたる所、岩に手を挟まれて取れず、將に溺死せんとせしことありと云ふ。又將棋を好み、郡内にては其右に出づる者なかりき。

山田武左衛門、蛇のたたり

今より百數十年前、村上藩に山田武左衛門と云ふ人あり。大目付の役を奉じ、評判よき人なり（杉原の堀片近くに居る）。或る時妻が鏡台に向ひ居りしに、長押の上に大なる蛇出で來り鏡に映りぬ。妻驚き奇聲を發して武左衛門に告ぐ。武左衛門は薙刀を取り出し、散々に大蛇を切りて其の取り片付けを下男に命ぜり。下男之を仕末するに俵に數俵ありしと云ふ。數年後武左衛門、馬に跨り瀬波の祭禮見物に越きし歸途、乘馬急に怒り出し、武左衛門の地上に落つるや、其踵を喰へて一散に駈け出し、肴町鍛冶町を通りて大町まで引きずり來り、武左衛門は遂に落命せり。町の人々驚き恐れ、店の戸を閉

ぢたりと。傳へ云ふ。蛇が龍になりて昇天するには山に千年川に千年、海に千年、軒端に三日の修業を要す。修業中の蛇を殺したるため馬に化けて復讐せるなりと。

堀丹後守百萬石のお墨付

堀丹後守直寄は、村上城主として入部の時に徳川家康より、百萬石の祿を賜ふと云ふ、お墨付を所有して居たりと云ふ。或時幕府に其證文を示して、百萬石を請求せしに、幕府の老中受取りて檢するに、石の文字虫とち居たるを幸ひ、之は百萬石に非ずして、百萬兩なり、依つて佐渡金山を三ヶ年取らすべしと申されたり。直寄は此金によりて、臥牛山の城壘を改築し、居城の増築をなし、士分の増員等を行ひしかば、幕府より左の詰問を受けた。一、太平の世に城を築き、士を増すは如何。二、村上城は西に面し江戸に後を向けるは如何。之に對して直寄は、一、治に居て亂を忘れざるが爲め、二、村上城は西向きに非らず東にも上り口ありと苦しき答辯をなしたりしが、其後遂にお家斷絶するに至りしと傳ふ。（斷絶の理由は之れが爲めにあらざれども、直寄の當時勢の大なる事によつて傳ふる口碑として載す）

出生稻荷

村上本町の北端に仲間町あり。其の御持と稱する所に稻荷社あり。世人稱して出世稻荷と云ふ。藩政時代には仲間の士の屋敷なりしが、明治初年廢藩と共に村上藩士は學問を以て身を立つるの方針をとり。所謂人材の養成を目標とせしが、御持方面の藩士は財政豊かならざりしため、苦學を積み立て身せし者尠ならず。則ち弟子は此の稻荷社の堂に會して刻苦勉學せり。時には晝間小鳥を獲て之を

料亭に鬻ぎ、其の代を以て油を購ひ來りて燈火の代とし、夜遅くまで勉學を續け遂ひに成功するに至りし者、大竹澤次少將、永井金次郎樺太長廳官、稻葉岩吉(現朝鮮總督府修史官)永井庄吉(辯護士)其他の名士を續出せり。之れ皆稻荷の靈驗に依るものなりとし、崇敬益々深し、出世稻荷の名之より出づ。飯野に護摩堂稻荷あり。榊原侯以前の建立なるが、頗る靈驗あらたかにして、信仰せし結果成功して社會の重要な地位に進む者甚だ多し。依つて信仰益々加はり、昭和五年秋有志相謀りて、社殿を改築せり。

舊藩時代と雜事

藩士の娛樂 舊藩時代には、士分以上は特に禮節を重んじ、武士の品位の高上に留意したる結果、娛樂には極めて高尚なるものが喜ばれたり。殊に他の藩主の來訪等の場合には接伴役として、お相手を申上ぐるの必要上より、石取り以上の士分は詩、圍碁、謠曲等行はれ、扶持取り以下の士分は謠曲、和歌、俳句、圍碁等行はれたり。今尙ほ其遺風存せり。

士分以上の結婚 舊藩時代には、足輕仲間を除外とし、士分以上は城下町の者との結婚を禁止されたり。故に士分同士との結婚の外町民との結婚は出來ざりしなり。其の理由は藩主の移封の場合には士分以上は全部藩主に附添して赴く、他に系累を作りて煩はしき事の起らぬためなるべし。足輕仲間はその土地に残りて新領主に仕へたるものなれば制限はなく自由なりきと云ふ。

武術の稽古 武士が武道に精進し、武術を練磨するは當然の事なれども、身分に依つて凡そ左の如く定められたり。即ち石取り以上の士分は、馬術、槍術、劍術、弓術、柔術等を行ひ、扶持取り以

下の士分は、劍術、槍術、柔術、鐵砲等にして馬術は行はざりき。又足輕には劍術、柔術等を行はしめたるものなりと云ふ。

足輕の住所と役目 足輕は其役目に依つて住所に區分あり、即ち御持方面は弓、石原方面は鐵砲、其他の方面は鐵砲、棒、三道具と定められたりと云ふ。

仲間の役目 仲間の役目も種々ありしが、凡そ左の如く定められたり。大部屋仲間、お守り屋仲間、馬屋仲間等にして、使、米搗き、道路の掃除等を行はしめたりと云ふ。

醫者は堀片と飯野 村上藩には藩醫を多く置かれたり。而して藩醫中には名醫あり、學者あり、漢籍詩等をよくする人あり、偉人傑士等もありたり。堀片は殆ど全部醫者の屋敷にして、一部は飯野方面にも置かれたり。醫者を城内に置かずして特に城外に住居せしめたるは、城外、城下町の人民にも随時に診療を乞ふ事の出來るやうにその思召より取り計はれたるものなりと云ふ。

御殿のお部屋 臥牛山の麓にある御居城は別紙添附の地圖並に全景圖等に示すが如く實に宏大なるものにて、藩侯の御在城と否とに關せず、家老以下毎日出仕して、各其役目を果したるものなるなり。先づ正面の大通りより入れれば堀に添ふて一文字木戸を通りて一文字御門に入る。右に大鼓櫓あり左に御番所ありて、つき當りに御金藏あり。夫より御玄關あり、御玄關の間の左にはたまりの次に御廣間、大書院あり、公式の儀式を行はせらるゝ處なり。其奥には役人詰所、次間、小書院あり、右は御膳立間、お臺所となる。其奥にたまり、御家老詰所、役人詰所、小姓部屋、御醫者部屋あり。最奥が藩主の御居間となる。お庭には御泉水池ありき。

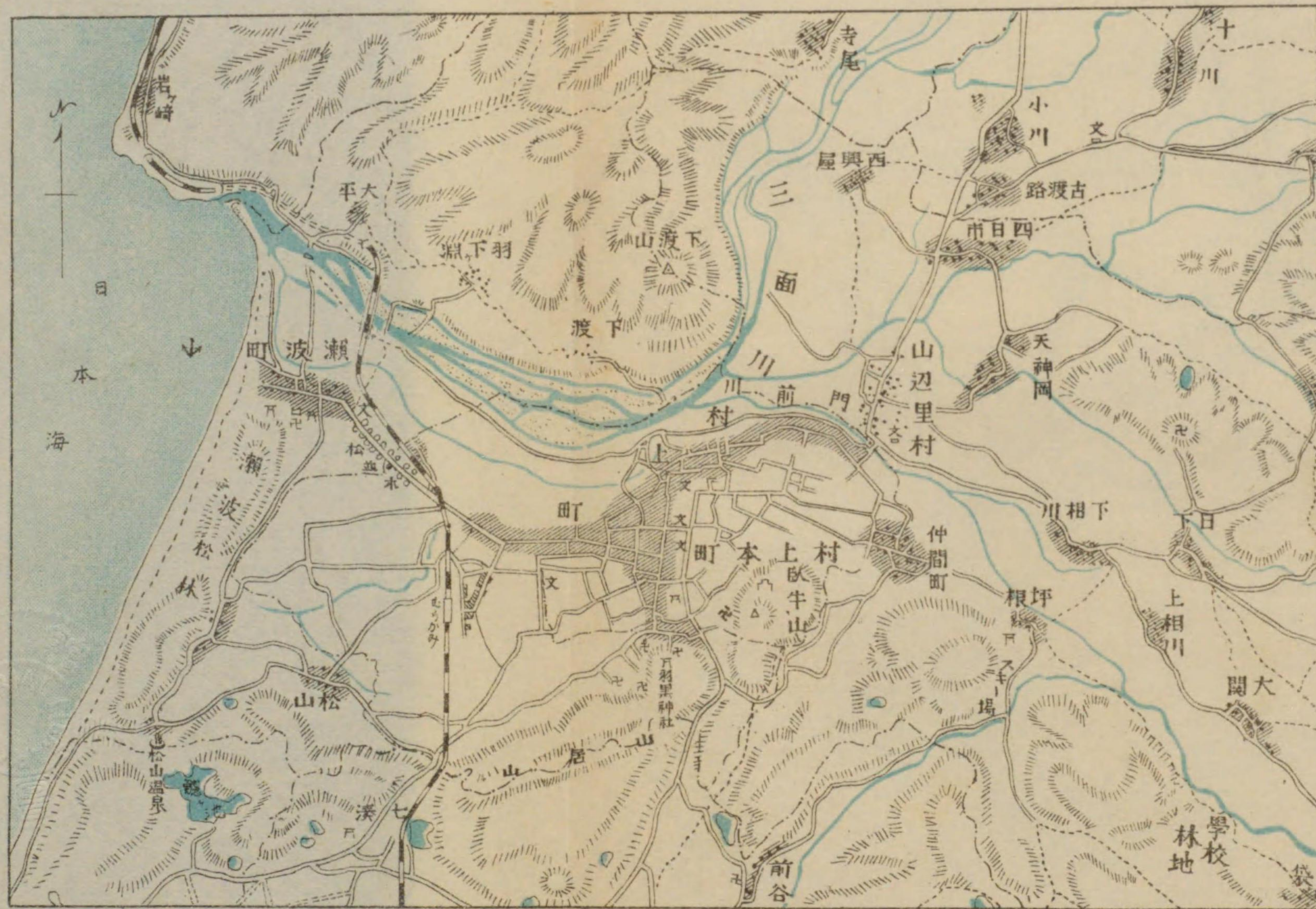
お城山の四つの門 臥牛山には所謂山城にして(添附の村上舞鶴城全景參照)堅固なる城壘を築

き、天守閣を始め樓閣天を摩するの壯觀を呈し、廣き訓練場等ありしが、其上り口には四つの門と稱す門あり。此の門は重要な責任を有する事として、此の御番人は石取り以上の士分を以て之に當てられ、扶持取り以下の士分は門内に入る事能はざる制なりと云ふ。今尙は殘壘ありて昔の係を存せり。

村上町は無税地の事あり 歴代藩主が城替となりて、新領地に初入部さるゝ時は其の城下町の大年寄以下各役の人々を始め、一般町民にまでお土産を遣はさるゝが例なり。然るに内藤式信公駿州田中城より、村上に主替となり入部さるゝ時、お土産を廢して其の代り城下町の村上は、無税地と定められたりと傳ふ。然れども信敦公初御入部の記録（二七〇頁参照）には町民一般にお土産あり、文政五年の村上町の年貢石高一、三九九石とあれば永く續きたるにあらざるが如し。

粟生島の年貢 粟生嶋は世々村上藩領なりしが、米の産額少きため、年貢として米を納入すること能はざりしかば、粟生島に限りて萱を年貢として納めしめたり。納まりたる萱は全部士族屋敷の屋根に使用したりと今も尙ほ島萱として年々當地に移送さる。

村上附近略地圖



- 路
- 町村界
- 小路
- ⊙ 寺院
- ⊙ 神社
- ⊙ 山地
- ⊙ 湖池用水池
- ⊙ 文學校

日本海

大場澤
下山田

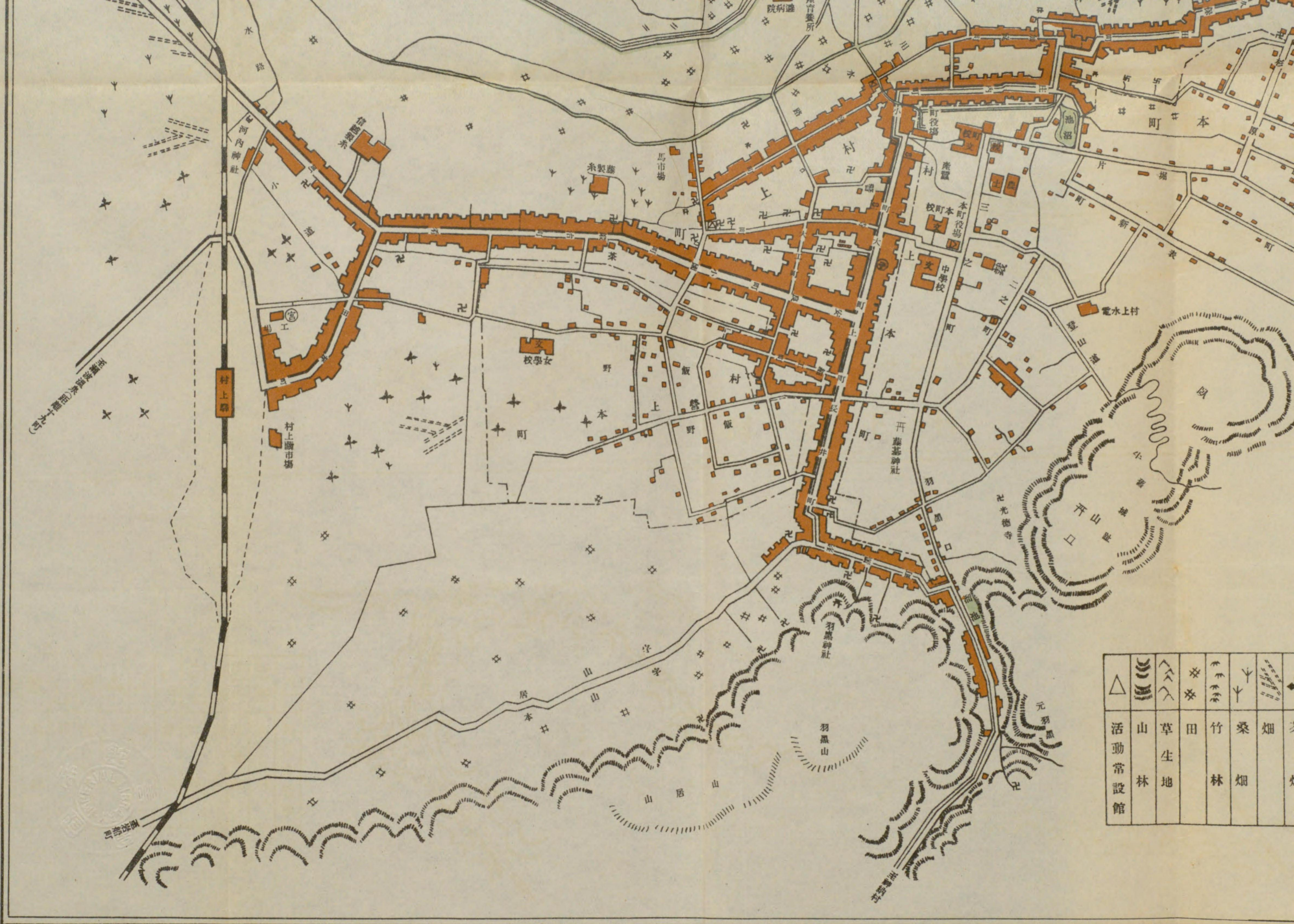
村 上 全 圖

縮 尺 壹 萬 貳 千 分 之 壹

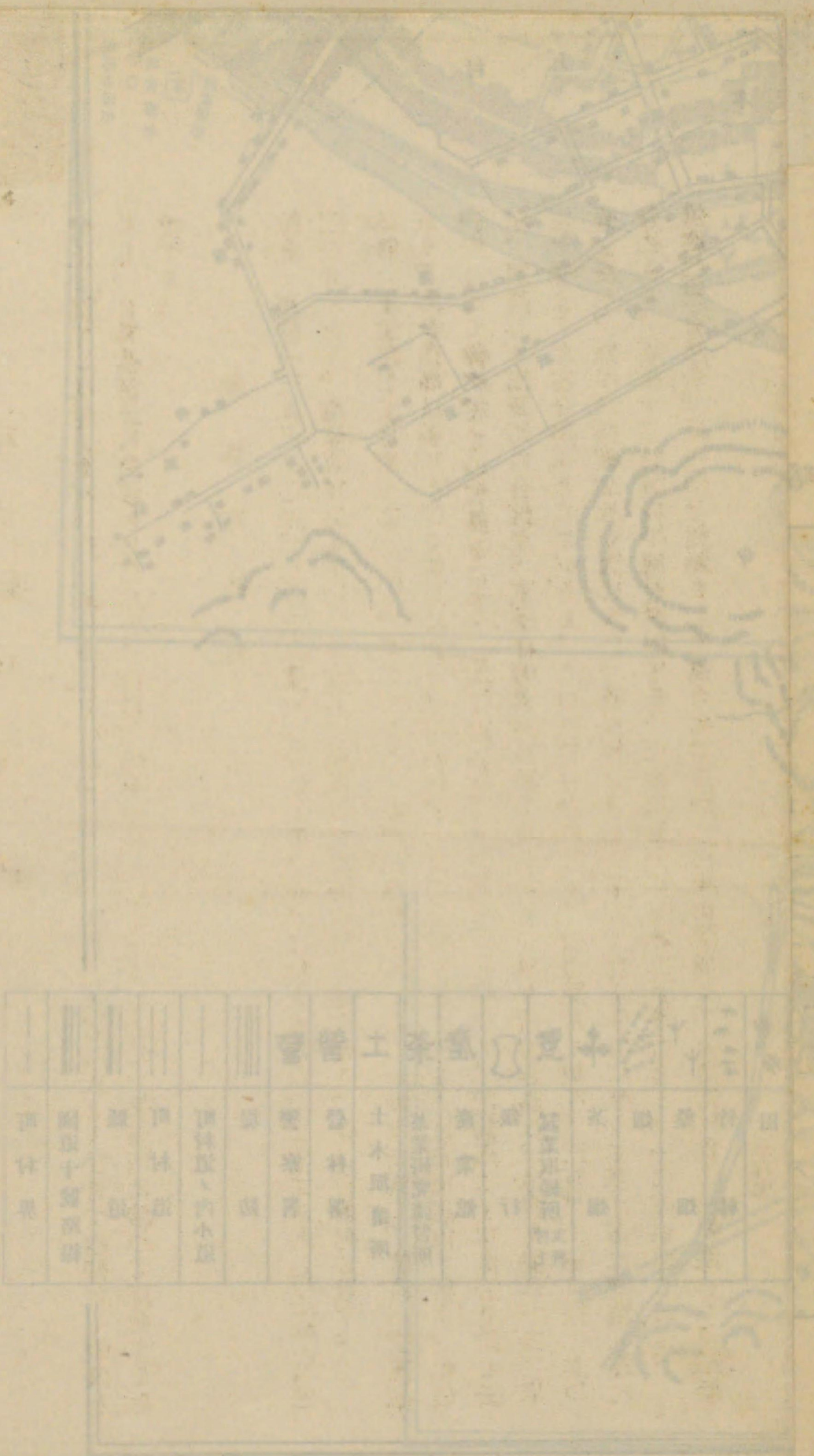




△	〰	〰	※	※	〱	⬥	⬢	〰	〰	〰	〰	〰	〰	〰	〰	〰	〰	〰	
活動常設館	山林	草地	田	竹林	桑畑	茶畑	蠶業取締所支村所	銀行	産業館	茶業研究講習所	土木派遣所	營林署	警察署	堤防	町村道ノ内小道	町村道	縣道	國道十號路線	町村界



△	〰	〰	✳	✳	✳	✳
活動常設館	山林	草地	田	竹林	桑畑	畑



第六編 現代誌

村上と稱するは村上本町、村上町を含めての總稱にして、兩町は舊藩時代より極めて密接なる關係を有し、日常生活上に交渉が甚だ多い。舊村上藩を中心として考ふる時は、勢兩町に涉つて記載するを要する。

地理的概観

位置。東經一三九度三〇分、北緯三八度一〇分にして、面積は村上本町〇、〇九三万里、村上町〇、三三四万里あり。境域東は山邊里村に接續し、西及び北は瀬波町の地に連り、南は神納村と境す。

地勢。土地概して沖積土より成り、平坦である。東部に臥牛山あり俗にお城山と稱す。標高一三五米あり。此の南部は西にのびて海岸に向ひ、神納村字七湊の北端に於て終る。之を山居山と稱す。北の脊梁に於て神納村との境界をなす。北には門前川、三面川の二川あり、門前川はまた山邊里川と云ひ、西流して三面川に合流す。夏季は河水涸れ勝ちなれども、偶々大雨あれば、水忽ち溢れ、時に岸堤を破りて水害を與ふることがある。この川の左岸に於て、山邊里村と境す。三面川は朝日嶽に其の源を發し、數多の細流を合せ西に流れ、高根川を合し南下して村上の北に至りて再び西に轉流し遂に海に入る、蜿蜒十里流域の平地を灌漑する。三面川を距て、北に下渡山あり。一に螺峯山と云ふ。

標高二三七米余。此の山を起點として東へ北の方向に海岸山脈走る。下渡山は其の山姿優しく、三面

川の清流と共に一の景観を添へてゐる。西は多く畑地にして、茶畑、桑畑又は蔬菜畑をなす。海岸に近く廣潤として、視野開け一瞥既に爽快である。瀬波町地域を接続してゐる。氣候 概して温暖である。氣温は八月に於て最も高く、平均(二四、四一)二月の候最も低い。平均(〇、六九)寒暑の差は二十三度内外にして、他に比し凌ぎ易い方である。雨量も相當にあり、乾濕の度も又悪しからず、農作に適してゐる。

戸 數 人 口

村上本町は本籍者の約三分二は、官吏、軍人、教員其他職業上の都合に依り、出寄留者となつて他に轉住し、本町に在住する者は僅かに三分一に過ぎない。然れども土地が住宅地として適して居るために、村上の諸官衙、學校等へ奉職する者多くは、本町に入寄留者となつてゐる。村上町は出入者相半し、年々幾分の増加をしてゐる。左表は第一回の國勢調査並に其後五ヶ年毎の統計で其他は昭和四年度の統計である。

村 上 本 町

世帶數	大正九年		大正十四年		昭和五年	
	人		人		人	
	男	女	男	女	男	女
計	四四〇	九七〇	四九五	一、〇七六	五七〇	一、一七〇
男	二、〇六六	一、四〇六	二、一九九	一、四一三	二、五八五	一、八五〇
女	二、三三四	一、四六四	二、七五五	一、六六三	三、一九五	一、九二〇

村 上 町

世帶數	大正九年		大正十四年		昭和五年	
	人		人		人	
	男	女	男	女	男	女
計	一、七三三	四、〇〇二	一、七八一	四、三五五	一、八五〇	四、五七六
男	一、〇〇二	四、四九四	一、〇〇二	四、四九八	一、〇〇二	四、五七六
女	七三一	三、五〇八	七七九	三、八五七	八四八	三、〇〇〇

本籍 出寄留 入寄留 現在

戸 數	本籍		出寄留	入寄留	現在
	男	女			
計	九四七	二、七〇八	六四六	二四一	五三二
男	二、七〇八	二、一六四	四一九	九六三	一、二〇七
女	二、七〇八	二、〇三五	五三三	一、二〇七	二、七〇八

出産 死亡 死産 婚姻 離婚
 一八四 一〇五 一〇五 一〇五 一〇五

計	男		女		計
	男	女	男	女	
計	一七六	三二	九二	五	五
七〇歳以上	三〇	三	四	三	七
八〇歳以上	三	〇	〇	〇	三
九〇歳以上	〇	〇	〇	〇	〇

本籍 出寄留 入寄留 現在

戸 數	本籍		出寄留	入寄留	現在
	男	女			
計	二、〇五六	五、一五三	一、五七六	一、〇三三	一、八〇五
男	五、一五三	一、五七六	一、〇三三	四、五九八	二、〇五六
女	五、一五三	一、四二六	一、二二六	四、九五四	二、〇五六

出産 死亡 死産 婚姻 離婚
 一六五 二二七 一五 一六三 二二

計	男		女		計
	男	女	男	女	
計	一六五	二二七	一五	一六三	二二
七〇歳以上	一六五	二二七	一五	一六三	二二
八〇歳以上	三	三	〇	三	四
九〇歳以上	〇	〇	〇	〇	〇

反 別 地

田	村上本町		村上町	
	戸數	人口	戸數	人口
計	六八、九二一	八六二、八二二	八四六、五三二	二七、八五六
七〇歳以上	三〇	四	三	一
八〇歳以上	三	〇	〇	〇
九〇歳以上	〇	〇	〇	〇

地 價

田	村上本町		村上町	
	戸數	人口	戸數	人口
計	八四六、五三二	二七、八五六	一、三七一	一、〇九二
七〇歳以上	三	三	〇	〇
八〇歳以上	〇	〇	〇	〇
九〇歳以上	〇	〇	〇	〇

筆 數

田	村上本町		村上町	
	筆數	面積	筆數	面積
計	一、三七一	一、〇九二	一、三七一	一、〇九二
七〇歳以上	一	一	〇	〇
八〇歳以上	〇	〇	〇	〇
九〇歳以上	〇	〇	〇	〇

畑	五九一、一〇一	一、七五五、五二五	四、四八一、五三	二六、八二二	一、五〇五	二、五〇四
宅地	八九六、八三二	一五、八七九	二四、七五、九	一三七、一五五	九〇二	二、七九一
山林	二五七、二二〇	二八一、三五	七四、四一	七九	三三	七六
原野	三五、〇〇一	五、九一〇	六、九四	一五	四九	九七
雑地	八、九二四	五〇四	二、六七	一四	六	三
計				一九一、九四〇		六、五三二

學 事

村上本町に小學校一、附設の青年訓練所一あり。村上町に小學校一、附設の商工補習學校と青年訓練所とあり。縣立村上中學校と縣立村上高等女學校とは何れも村上本町の地内にあり。其他私立學校、幼稚園等の設けはない。

村上本町村上尋常高等小學校 明治六年一月の創立にして、校舍は明治十二年五月の建築の儘今日に及ぶ。以前村上私學校は其校舍の一部に設けられてあつた。本校出身者中に名士が甚だ多い。現在は七學級生徒數三五五人、職員八名校醫一名にして、一ヶ年の經費九、四四二圓を要す。

村上町尋常高等小學校 明治六年五月の創立にして、其の當時貫決舎(大町十輪寺の傍)上片町小學校(地藏堂を校舍に充て後龍淵寺に移す)の二校ありしが、二十年三月合一す。現在二六學級生徒數一、四五二人、職員三〇名校醫一名學校看護婦一名にて、一ヶ年の經費二九、九八二圓を要す。

縣立村上中學校 明治三十三年四月、新發田中學校分校として創立せしが、三十五年四月獨立す。

校地校舍は數回に渡りて増設増築し、現在は敷地六、一八五坪、建物は一、四五二坪あり。學級數一四、生徒數四九一、卒業生一、二〇八人職員二九人(内書記二人、他校より兼任二人配屬將校一人校醫一人休職一人を含む)一ヶ年の經費四五、三二四圓である。在學生徒中岩船郡三九八他郡市他府縣は九三にして、内村上本町在學七六、卒業生三二六、村上町在學一〇一卒業生二一八人である。

縣立村上高等女學校 大正二年四月郡立實科高等女學校として創立せしが、大正十一年四月縣立高等女學校となる。校舍は創立後二回の増築あり、現在校地四、六七一坪、校舍建坪五五一坪、全二階坪一四六坪五合、寄宿舎二二二坪あり。學級數八、生徒數三一八、卒業生七四二人。職員一九人(内書記二、囑託一、校醫一を含む)一ヶ年の經費二六、一六六圓を要し外に校友會費一、五三〇圓、獎學會費五二〇圓あり。在學生徒中岩船郡二六四、他郡市他府縣五四である。

財 政

村上本町の基本財産は、町有六、三三圓 小學校有四、〇五圓 其他土地三、〇三坪ある。村上町は、町有二〇、〇八圓 小學校有七、八七圓 其他土地七、五二坪あり。兩町の税金左の如し

	國 稅	縣 稅	歲 入	經 常	臨 時	計
村上本町	二、五四〇	二、四八二	一八、八八五	一八、二五七	六六	一八、八八五
村上町	三、七六五	四、七五五	五、四九	五、四七〇	一、九五九	五、四九

産業

村上本町は官公吏教員醫師等多く大部分は所謂俸祿者にして、農工商を業とする僅少である。ために産業方面は專業とする者少く兼業者も極めて僅かである。左は昭和四年度の調査に依る。

養蠶	飼育戸數	掃立枚量	繭		計	金額
			玉	屑		
春蠶	三三	二七三	二五	六	三〇四	二、二五一
夏秋蠶	二〇	七	一八	四	二二	五二八
計	五三	二八〇	四三	一〇	三九〇	二、七六九
桑園	段別	二四九反	收穫量	七、四七〇貫	金額	一、八六七圓
茶園	"	八二"	"	三、二八〇"	"	一、三二二"
田	自作	五八	計	六九	"	三、一二〇"
畑	小作	五四	計	五九	"	九、二五五"
牛乳	搾乳戸數	四戸	乳量	一一五石	"	一、六六〇"
養鶏	成鶏	三二〇羽	卵	一〇、八四ヶ	"	九、九〇八"
工業	木羽製造	四戸二人	製造商	三、〇〇把	"	一二、〇〇〇"
	スキ			八、〇〇丁	"	

此の外、鮭鮎の産は相當の額に上つてゐる。之れは鮭産育養所の經營にかゝるものである。

村上町は商工業地にして従業者多く、物産甚だ多量である。年額計二、五二五、壹九壹圓に達す。

米	二、三〇円	五九、二九円	菓子	七、〇〇〇	化粧品類	一、〇〇〇
清酒	四、一三	三七、四六〇	木製品	六四、九〇〇	飲食品類	五九、三九五
茶	四、四〇	一四、二〇〇	農具	三、〇〇〇	農産物	二五、五一
漆器	九、〇〇〇	一〇、〇〇〇	スキ	一四、〇〇〇	其他	六、七〇九
生絲	一、四八五、六七六		履物類	二六、〇〇〇		

交通

村上本町の二之町は道路の幅廣く、平坦にして良しけれども、其他は一般に道幅狭く且つ曲折多く、車馬、自動車の交通頻繁を加ふるに随つて改善を要するものが多い。道路は、鼠ヶ關線(國道拾號線)村上岩船線(全上)村上瀨波線(全上)門前村上線、村上停車場線、松山村上停車場線等主なるものである。兩町に於ける交通機關は左の如くである。

村上本町	町道延長	街燈	荷車	自轉車	小廻船	自動自轉車	リアカ	自動車	電話
五里五町三九間	五九	五二	一四六	六	一	七		二四	
村上町	二、九、四三	一九二	四八〇	一、〇九一	八	七	二〇三	二〇	一四〇

鐵道は大正三年に至り、村上線の名の下に、新津村上間の開通を見、大正十三年羽越線の全通するに及び、全國との交通開け、貨物の出入量多きを加ふるに至つた。最近自動車の發達俄に激増し、村上自動車商會、岩船町小幡自動車、平林齋藤自動車、女川村中束自動車等に依り、村上市街、瀨波温泉場には汽車發着毎に、猿澤、塩野町、高根村關口、平林村平林、女川村湯澤等へ日に數回往復して居

三面川の舟便は昔時より、舟又は筏により木炭、丸材等を三面、高根方面より輸送さるゝ事今日も變らぬ。海運は一般に不振であるけれども、帆船、漁船、發動機船等に依つて瀬波港、岩船港より、木炭、木材等を積出し、セメント、鐵類其他の移入に利用せらる。

兵 事

村上本町は軍人軍族に關係の者が甚だ多い。特に將校階級の者が多いのは、進んで軍人として身を立て國家のために盡さんとの志望を持つ人の多いためである。村上町は普通の状態であつて他の町村と變りがない。

町	上	村	計	現 役			豫 備 役			後 備 役			計	兵 充 補		
				將校	準士官	下士兵卒	將校	準士官	下士兵卒	將校	準士官	下士兵卒				
村上本町	陸軍	陸軍	陸軍	一五	一	〃	二五	二	六	二二	一〇	一	二三五	四	一七	六七
村上本町	海軍	海軍	海軍	九	一	一	八	六	〃	三	〃	〃	一六	一	四	一七
村上本町	計	計	計	二四	二	一	一九	二	九	二二	一	一	二三五	五	二	七五
村上本町	陸軍	陸軍	陸軍	五	〃	一	三	八	〃	三	〃	〃	六二五	一六	〃	一〇二七
村上本町	海軍	海軍	海軍	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
村上本町	計	計	計	五	〃	一	三	八	〃	三	〃	〃	六二五	一六	〃	一〇二七
村上本町	計	計	計	五	〃	一	三	八	〃	三	〃	〃	六二五	一六	〃	一〇二七
村上本町	計	計	計	五	〃	一	三	八	〃	三	〃	〃	六二五	一六	〃	一〇二七

徴兵検査成績

年	村 上 本 町			村 上 町		
	適齡者	受檢者	甲種 一乙二丙種 丁種 戊種	適齡者	受檢者	甲種 一乙二丙種 丁種 戊種
昭和二年	三	五	一七 三三 一四 〃 一	二八	一〇	四 一五 二五 三三 一一
全三年	四	七	二九 七七 六八 一 〃	九	二八	二六 二二 一九 一 〃
全四年	三	四	八 九 九 三 〃	八	一〇	一七 一〇 一九 二五 九 〃
全五年	二	五	二五 五三 二 〃	一三	二二	二八 一六 三四 三 〃

社 寺

村上本町には縣社一、無格社（秋葉神社、大山祇神社、古峰神社外稻荷神社九）あり。寺院は光徳寺のみ。教會に天理教村上教會、金光教村上支所あり。村上町には縣社一、無格社一四あり。寺院は曹洞宗七、淨土真宗九、日蓮宗四、真宗一、真言宗七、淨土宗三、古義真言宗一、臨濟宗一、計三三あり。其他に日本基督村上教會あり。

衛 生 及 救 濟

村上の地は海近く、山又近く随つて、空氣、水共に清くして、氣候風土も健康地として認むるに足る。住民は一般に健康にして特殊の風土病なく、傳染病は村上本町に於ては近年殆ど發生を見ない。村上町には近年僅かに腸チブスと赤痢患者があつた位のものである。トラホーム患者も僅少で、蛔蟲其他体内寄生虫の保有者も其率が低い。随つて長壽高齢者が大層多い。

只齷齒の多い事だけは他に劣らない。醫師其他の衛生機關も相當に多く整つてゐるが只完備せる病院のないため、重病者は新潟等へ赴く者が多い。斯く健康地であり人々の衛生思想も進んでゐるのに、毎年の壯丁検査の結果から見て、其成績が兩町とも郡下の下位にある事は、積極体育の不足のためならんか、大に考慮を要する点である。

種痘	齒師	齒科醫	眼科醫	獸醫	產婆	看護婦	藥種商	藥劑師	灸鍼	善成	不善成
村 上 本 町	八	二	一	二	六	四	〃	〃	〃	〃	〃
村 上 町	八	四	〃	〃	五	〃	九	二	七	〃	〃
計	二六	六	一	二	二四	九	二	七	四七	七	〇

救濟 村上本町赤十字社員六二、愛國婦人會員八一、村上町赤十字社員二三一、愛國婦人會員二四六あり。

消 防

警火に對する注意一般に行き届きあると、設備環境のよいために、近年兩町とも殆んど大火のない事は、眞に喜ぶべき事である。

組頭	部頭	小頭	消防手	腕筒	瓦斯筒	消防用井戸	鐵骨樓	木造樓	水溜溜池
村上本町	一	二	〃	四〇	一	〃	一	〇	一
村上町	一	四	八	二〇三	五	四	五五	三	一
計	二	六	八	四〇	一	〃	一	〇	二

官公署及諸団体

名 稱	所在地	職務事務	設置年月	備 考
村上 税 務 署	三之町	稅務ニ關スル事務	明治廿九年九月	始め新潟縣收稅務村上支所と云ふ。
村上 警 察 署	小 町	警 察 事 務	明治六年二月	始め村上取締所と稱し明治八年二月改む。
村上 郵 便 局	大 町	通信、爲替、貯金、保險	明治五年七月	外ニ驛前郵便局あり。
村上 營 林 署	飯 野	國有林の管理	明治廿年五月	始め小林區大正十二年改む初め淨念寺に置き明治十二年藤基神社側に移す再移す。
村上 區 裁 判 所	三之町	訴訟裁判及登記	明治十年一月	本所は縣廳内
村上 土 木 派 遣 所	全	土木事務管理	昭和 二年	
米穀 檢 査 出 張 所	田 端 町	米 穀 檢 査	大正五年四月	全
蠶業 取 締 所	支 所 小 町	蠶 業 取 締	明治四十一年	
村 上 本 町 役 場	三之町	役 場 事 務	明治廿年四月	
村 上 町 役 場	小 町	全		
岩 船 郡 農 會	三之町	町村農事指導	全廿九年八月	水稻の改良をも爲す。
岩 船 郡 養 蠶 同 業 組 合	(郡農會内)		全卅五年六月	昭暉より事業を休止せり。
岩 船 郡 木 炭 同 業 組 合	(全)	木炭業改良進歩	大正十年二月	

岩船郡茶業組合（全）製茶改良 明治四年十月
 岩船郡産牛馬畜産組合（全）牛馬畜産の改良 明治四十二年
 増殖
 岩船郡酒造組合組長宅内 醸造業進歩改良 全卅八年十月
 岩船郡販賣購買利用組合田端町 繭の販賣設備の 大正二年八月
 利用
 鮭産育養所 篠場 三面川漁業經營 明治五年四月
 教育助勢
 岩船郡立物産陳列館小町 郡産業改良發達 大正九年九月
 岩船郡教育會村上町校 教育の進展 大正十五年
 岩船郡女教員會村上町校 全上 郡内教員全部を以て組織す
 岩船郡育英義會村上校 育英經費貸與 明治卅年二月 成功者二五人現に貸費生九
 各町村在郷軍人分會の聯合
 岩船郡軍人分會村上町役場 在郷軍人會 なり。
 岩船郡青年團村上町校 青年修養 全上
 岩船郡女子青年團村上高女校 女子青年修養 全上
 其他其町單位の教育會、軍人分會、男女青年團（村上町のみ）、婦人會、武談會、至動會等の團體あり。

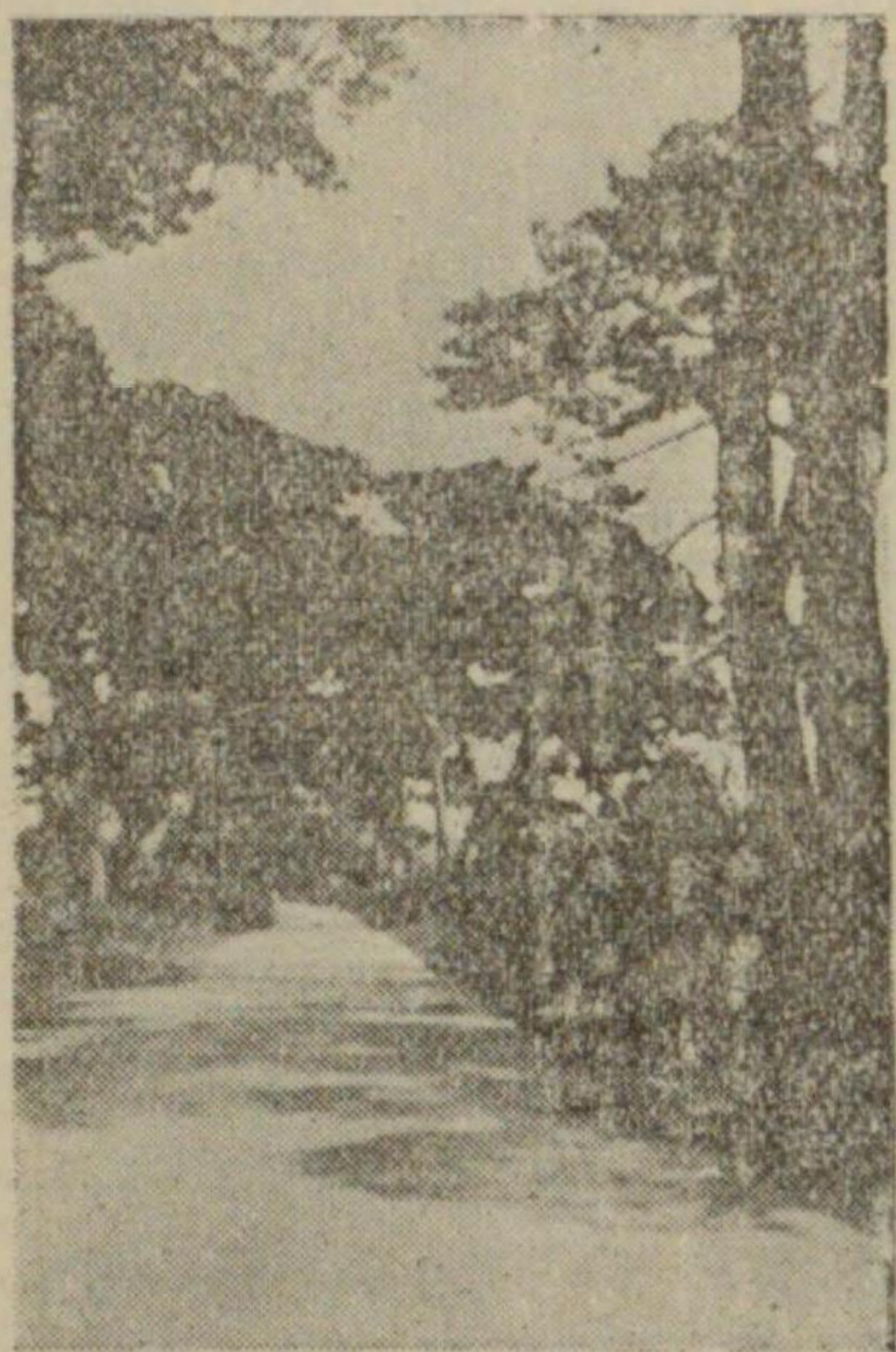
銀行會社工場

銀行には村上銀行、第四銀行村上支店、新潟貯蓄銀行村上支店あり。會社には村上水電株式會社、村
 上都株式會社、益田酒造株式會社、村上合同運送株式會社、共立製材所、村上自動車商會、村上木材
 工藝合資會等あり。工場には信越製絲工場、藤製絲工場、入喜製絲工場、村上木工場、宮本農具製作
 場、村上スキー工場、藤サイダー製造所、菅原工場等主なるものである。

新聞

村上新報社は大正十五年九月の創立にして、旬刊より進みて昭和五年より週刊となる。村上地方を始
 め岩船郡の事情を詳報し地方開發のために勤む。
 其他新潟毎日新聞、新潟新聞、北越新報、新發田新聞等の支局あり。

郊外附近名勝地

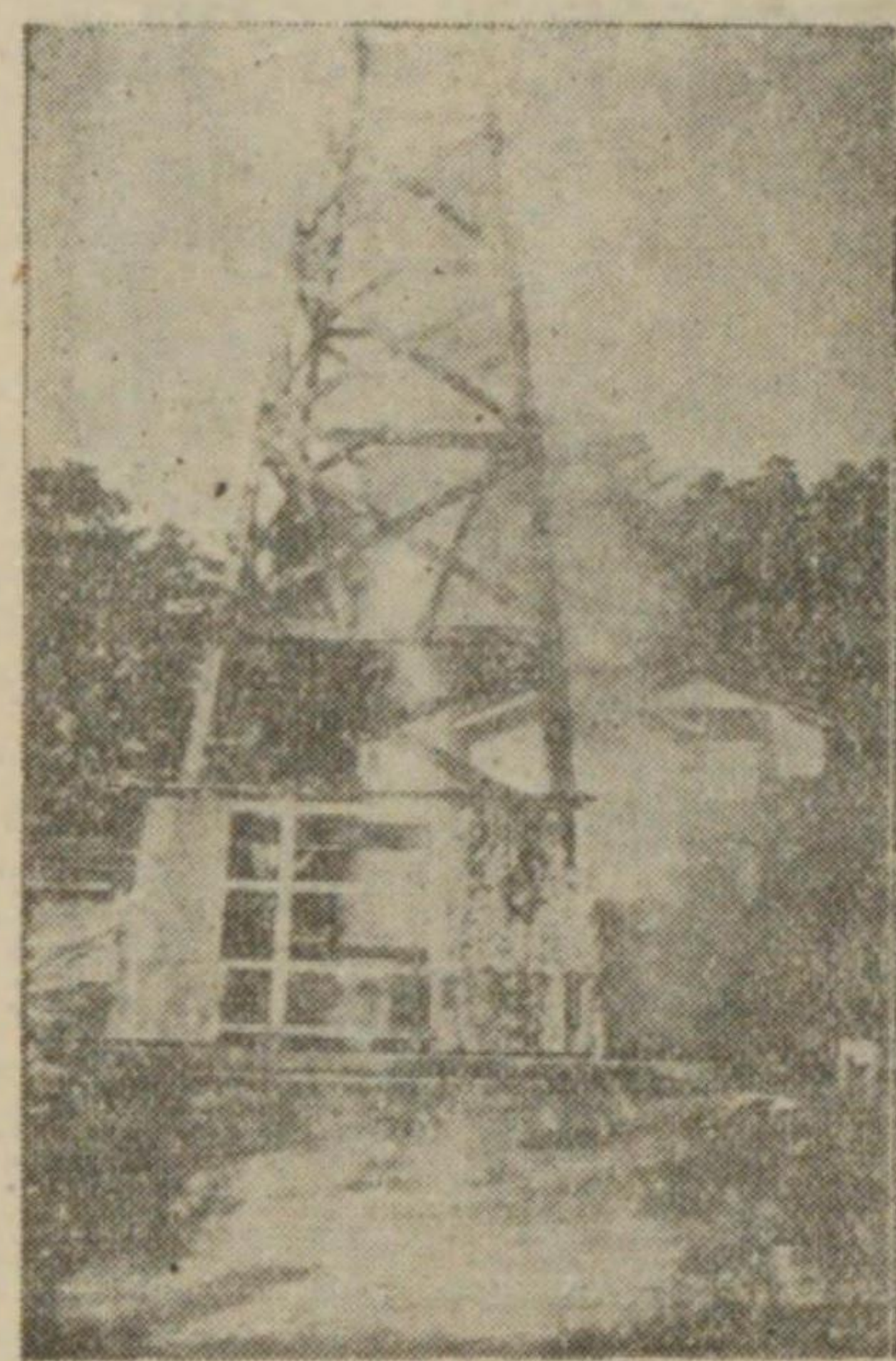


(町八原松)

松原八町 瀬波街道に當り、道兩側に老松百餘株、枝を
 交へて並木をなす。風光絶佳、昔時藩公の大名行列を
 なして通過されし本街道である。
 三面川 水清らかにして、春は新緑の蔭に瀬の音淡く、
 秋は紅葉を浮べて蜿蜒其の美を寫し、夏は涼風頻りに
 來り、冬又白雪の間野鴨來りて獵客を招く。四時漁あ
 り。鮭川の名は全國に知られ、鮎の漁又多い。

瀬波温泉 瀬波町字松山にあり、松山温泉とも呼ぶ。明治三十七年石油採掘の目的にて掘鑿せしに熱

湯が吹き出したるものにて、晝夜間斷なく九十尺の高さに噴出し一大奇觀である。温泉場は後に緑



(場 湯 噴)

滴る丘陵を負ひ、前面に豊饒限りなき田圃展開し、遙に羽越の連山を望み、松籟颯々として音づれ、雜草を踏めば渺々たる日本海が双眸に入り、遠く粟生島、佐渡島墨繪の如く浮ぶ、夕陽海に映じて殊に美しく、夏は海水浴に楽しみ、秋は松茸狩りに賑ふ。量趣溢るゝ名温泉場である。湯は百三十九間の井底より攝氏百五十度の温熱を以て噴出し泉質は塩類泉にて、空氣清澄、遊覽保養の絶

好地である。

瀬波港 三面川の海に注ぐ河口にして、北岸は奇岩絶壁をなし、南岸洲崎を隔て、一長街を形成する漁業町である。寛治三年七月源頼綱の臣三浦三郎兵衛信慶の圖せし越後の國圖にも背波の文字明記され、上古は西奈彌と云ひ、中古は瀬波郡足利の末期兵を瀬波衆と稱せり。古本源平盛衰記、義經記、弘安二年の古文甲越軍記等に見える文字は一樣でない。背波、千浪、西奈彌、瀬波の文字が用ひられて古くから開拓されし地である。明治の初年頃は此所に船舶出入繁しく、村上茶及び附近の移輸出をなした。

西奈彌神社 延喜式所載で村社である。保命命を祀る。往古大神五神の臣(吉田、小嶋、伊與部、磯部、小武の五氏)と共に御船に召され、荒海を漕がせ給ひし時、此地をみそなはせ、是れ清き渚の好き處よと宣ひしにお背の方に重き波頻りに起り御船進み速かに着かせ給ふ。以後背波と名付けられたりと傳ふ。産土神と仰ぎ奉る。

山邊里橋 門前川に架した橋梁にして、昭和四年に改架し、當代の美觀をなす。モダン橋の稱がある。門前川以北への往來は皆此の橋を渡るものにして實に人馬の往來頻繁である。

螺峯山 一名下渡山と呼ぶ。山麓に下渡、羽下ヶ淵あり、近郷一眸するを得べく眺望に富む。『下渡や羽下ヶ淵田舎と思ふな村上五萬石眼の下だ』又『下渡山に振袖着せて奈良の大佛婿にどる』の民謡がある。

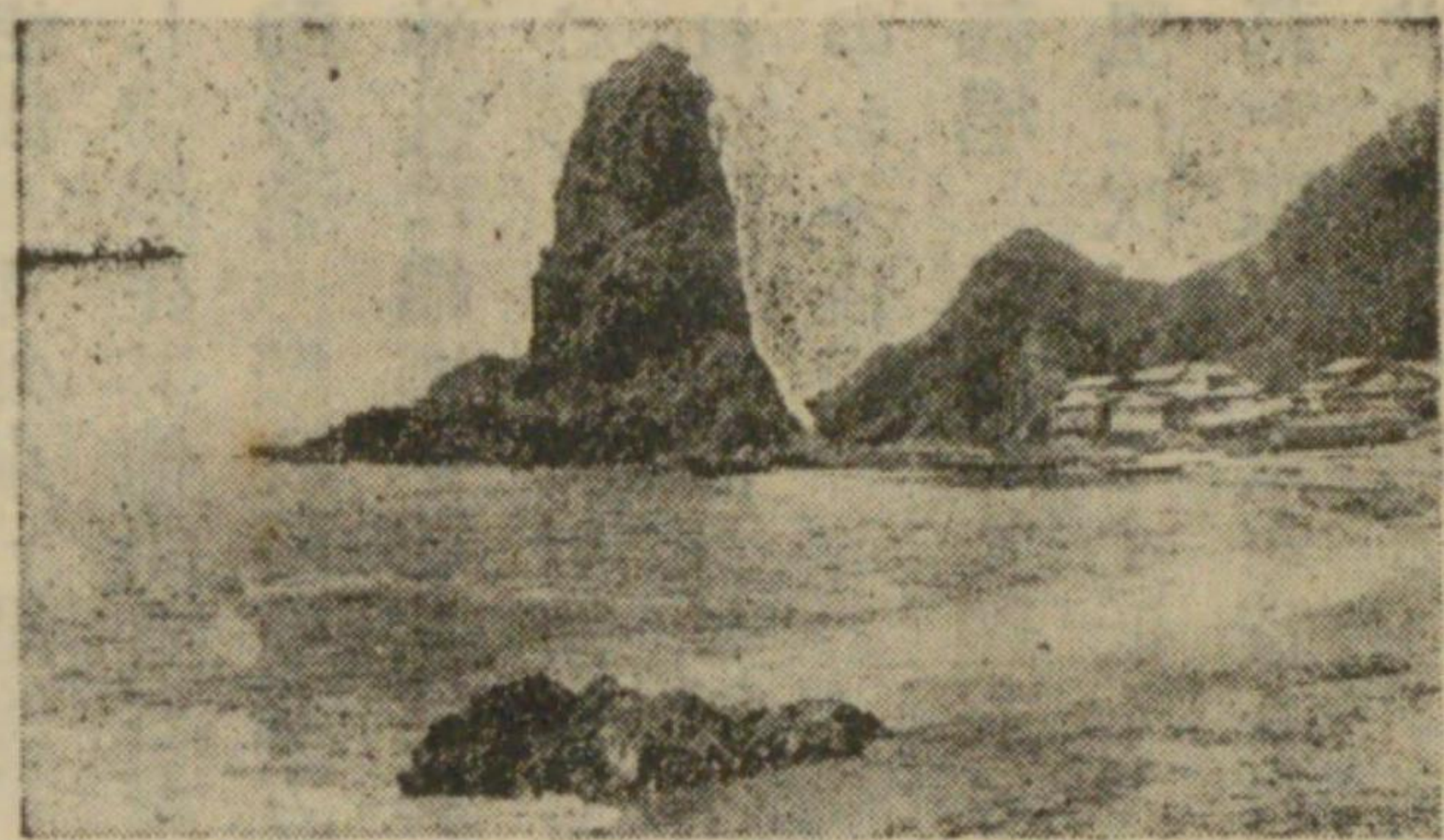
坪根山 郊外東一里餘、山邊里村坪根の地にあり、嚴冬の候、白雪山を覆へば好適のスキー場と化し、學生其他集る者が多い。春暖若葉の崩え出る候には蕨折るに甚だ良い。

不動の瀧 瀬波港の北方、螺峯山派を成せる岬角を去る纜にして、清流に添へる奇岩に鎮座せる多伎神社は端姫を祀り延喜式所載の神社である。現在は上海府村の地域に編入せらる。祠の背後は鬱蒼として、木々が繁茂し、林間より流れ來る水は、祠の傍ら岩壁をなせる處に飛瀑となり落下す。之れが不動の瀧又は瀧不動と稱す。納涼に又景趣に富む『ごんごんと鳴る瀧はどこだ、あれは瀬波のお多伎様』

御幕場 岩船町と鹽谷との中間に十數町に渡る松林あり。塩谷に近い處には白砂青松相連り、強き塩風に吹かれて丈低く、枝振り妙を極め、風致の優雅、恰も一大庭園に入るの感がある。往時藩侯が幕を張りて景を賞されたりとて此の名あり。今尚は遊覽のため杖を引くもの、學生の遠足等に春秋共に賑うて居る。

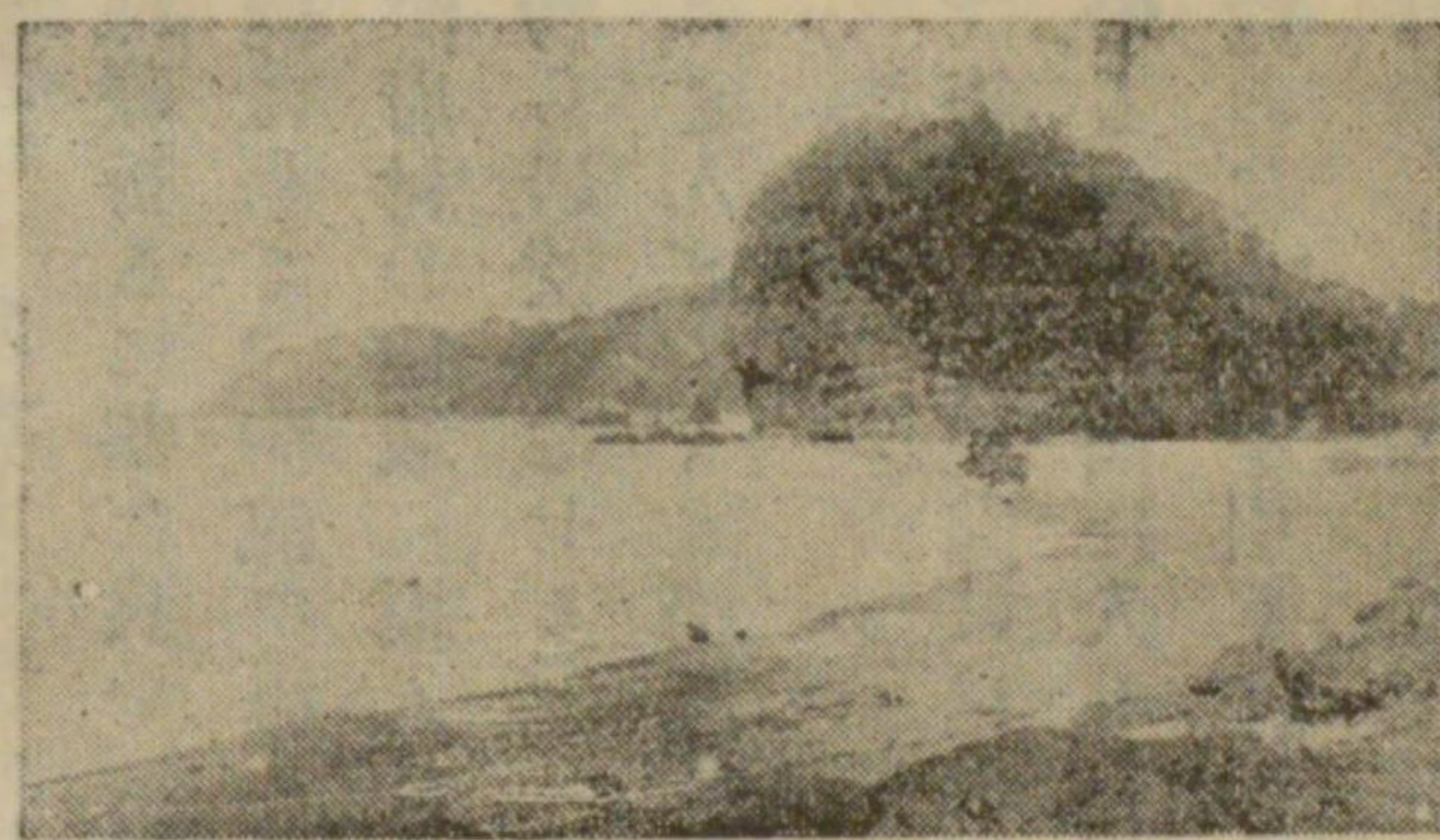
笹川流れ 村上驛を距る北方約二十軒にして桑川驛に達す。同驛より寒川驛まで約十二軒に至る海岸

一帯の景勝地であつて奇岩怪石突兀として聳え、數百の島嶼其の間に點在し頗る男性的の風趣あり。



(岩立鉾)

頼樹三郎が海府浦遊記に「松島は此美觀を有すれどもこの奇景なし。雄鹿は此の奇拔を有すれどもこの美觀なし」と發表したるに徴するも、如何に天下の絶勝地たるかを知るに足らむ。又此處に遊覽船の設備あり。



(山幡八)

昭和六年一月廿五日印刷
昭和六年一月三十日發行

【非賣品】

新潟縣岩船郡村上本町(村上尋常高等小學校内)

編纂者 榎木繁之助
兼發行者

新潟縣村上町

印刷所 正英舎渡邊活版所

發行所

新潟縣岩船郡村上本町
村上尋常高等小學校内

村上本町教育會

314263

2177

